

## 自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究Ⅶ(3) ——幼児期に自閉症と診断され、後に修正された例について——

福井ふみ子\* 加藤 哲文\* 伊藤 健次\*\* 小林万利子\*\*\* 浜田 房子\*\*\*  
肥後 祥治\*\*\* 西尾 明子\* 前川 久男 小林 重雄

幼児期に「自閉症」と診断され、治療教育過程においてその診断が修正された5名に対し、就学後7年目(中学1年時)の追跡調査を行った。本研究の目的は、小学校から中学校へ進級した対象児たちの学校適応状況を調査し、さらに適応、不適応をもたらす要因について検討を加えることであった。調査内容は(1)学習能力、(2)学校生活、(3)対人関係の3点である。結果から、適応状況にあると言えるのがT. M., M. N.及びH. T.の3名、不適応状況にあると言えるのがK. Y.及びM. S.の2名であることが明らかになった。各対象児の適応、不適応の要因について考察する。

キーワード：自閉症児 追跡研究 学校適応 行動療法

### 1. 目的

本研究の対象児(近藤ほか1979)は、幼児期に他機関で「自閉症」と診断されたが、就学時に小林(1980a, b)の教育的診断基準によって、その診断が否定された5名から構成されている。これらの対象児はいずれも、幼児期にT大学K研究室で行動療法的訓練を受けてきた者で、彼らに対し、就学時より6年間にわたって、追跡調査が実施されてきた。本年度は、対象児が全員中学校に進学したので、学校場面を中心とした生活環境に大きな変化があったことが予想される。従って、それが対象児の学校適応状況に何らかの影響を与えていることも考えられる。

そこで本研究は、対象児の現在の学校適応状況を調査し、さらに適応、不適応をもたらす要因について検討を加えることを目的とする。

### 2. 方法

#### ①対象児

5名の対象児(イニシャルは近藤他[1979]と

共通)のプロフィール、訓練経過、就学状況及び中学校入学状況はTable 1.に要約した。

#### ②調査内容

本研究では特に以下の3点に関するデータに基づき、対象児の学校適応状況を調査した。

(1)学習能力：知能検査結果及び学業成績

(2)学校生活：学級内で分担している役割の遂行及び集団活動への参加程度

(3)対人関係：他児及び教師との関わり

調査には、田中・ビネー式知能検査、教研式集団知能検査、適応行動尺度(ABS)<sup>注)</sup>、チェックリスト(T-CLAC)を用い、さらに学級担任と母親へのインタビューを行った。調査は全て昭和60年3月～4月に実施した。

注) 適応行動尺度は精神薄弱児の適応行動を測定するための尺度で、知能水準として、知能指数とその標準偏差から求められるMIL (Measured Intelligence Level)を用いており、いずれのMILにおいても標準点4-6がほぼ知能水準相応の行動と評価される。第1部は、日常生活の場での自立に重要と考えられる行動を測定するための尺度で、第2部は、主にパーソナリティの歪みと行動異常に関係した不適切行動を測定するための尺度である。

\* 心身障害学 研究科

\*\* 市邨学園短期大学

\*\*\* 教育研究科

Table 1. 対象児のプロフィール・訓練経過・就学状況

	症例 1 (T. M.)	症例 2 (K. Y.)	症例 3 (M. S.)	症例 4 (M. N.)	症例 5 (H. T.)
性別・生年月日・主訴	男 S46. 2 ・ことばの遅れ ・落ちつきがない	男 S46. 9 ・仲間に入れない ・落ちつきがない ・ことばが少ない	男 S47. 3 ・ことばの遅れ ・対人関係の障害	女 S46. 8 ・ことばがない ・落ちつきがない ・尖足歩行	男 S46. 8 ・ことばがでない
インテイク	S51. 9 (4 : 9)	S51. 4 (4 : 7)	S52. 5 (5 : 2)	S50. 6 (3 : 10)	S52. 4 (5 : 8)
訓練期間	1年5か月	1年10か月	10か月	2年9か月	10か月
訓練経過	S51. 9~S52. 4 パズル, 円柱さし, 線引き S52. 4~S53. 2 発音, 文字読み(個別), サークット, 電車ごっこ, 綱引き(小集団)	S51. 6~S53. 3 書字, 数概念, 読み, 絵画(個別), 小集団学習	S52. 5~S53. 3 ことばの学習(あいさつ語, 助詞), 文字, 文構成(個別)	S50. 6~S52. 3 円柱さし, パズル, 絵カードマッチング, 発声・発語訓練, 絵カードの命名, 動作, 音声模倣 S52. 4~S53. 3 色・形・大小弁別, 記憶, トレーニング, 音声と文字のマッチング	S52. 4~S53. 2 発語訓練, 数概念, トレーニング
訓練終了時	ひらがな, 数字の読み可 概念学習課題可 文字は書けない 飽きたり, 要求が通らないと泣きや独語がでる	他者との会話が可能 課題への集中がよい 行動・言語面で著しい進歩あり	個別学習に集中して取りくむことが可能 基本的会話が可能 助詞の欠落, 疑問詞の理解不可	訓練中着席可, 絵カードの命名, 音声・文字による絵カード弁別可, トレーニングは不完全, 尖足歩行は改善されない	単語による, いくつかの会話が可能 基本的指示理解可, トレーニングは可能であるが描画はなぐりがき
小学校入学状況	普通学級(介助員なし) 4学年より週3時間, ことばの教室へ通級	普通学級(担任に障害や就学前に指導を受けていたことを知らせていない)	普通学級 週2時間, 情緒障害学級に通級	特殊学級 部分的に普通学級への参加	特殊学級 部分的に普通学級への参加
中学校入学状況	特殊学級 集会・行事は普通学級に参加	私立中学校普通学級(同上)	普通学級	特殊学級 体育・行事は普通学級に参加	特殊学級 集会・行事は普通学級に参加
診断名	精神発達遅滞	微細脳機能障害	微細脳機能障害	精神発達遅滞	精神発達遅滞

Fig. 1-1~1-5は, 小学校入学時(昭和53年3月), 小学校6年時(昭和59年2月)及び中学校1年時(昭和60年3月)のT-CLACの結果である。なお, 諸事情により, K. Y.児については, 今年度のデータを収集できなかったため, 小学校入学時及び小学校6年時の結果のみを示した。

T. M.は前年度よりも, 「衣服着脱」, 「動作模倣」, 「課題解決」, 「集団への適応」, 「言語」, 「絵

## 2. 結果

中学1年時の調査(検査)結果を以下の順に示す。(1)T-CLAC, (2)田中・ピネー-知能検査及び教研式集団知能検査, (3)適応行動尺度(ABS), (4)インタビュー。

(1)T-CLAC(T式 Check List for Autistic Children)

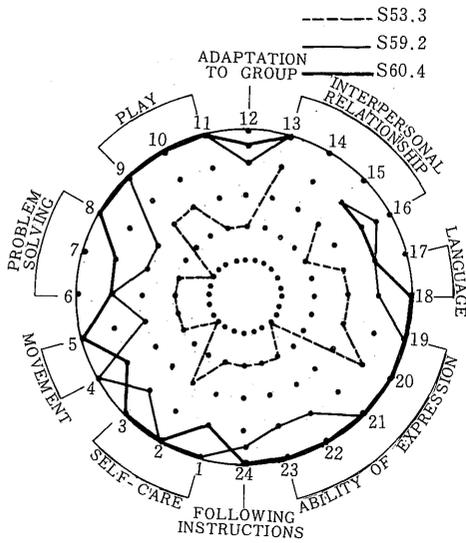


Fig. 1— 1 症例 1 (T. M.) T—CLAC

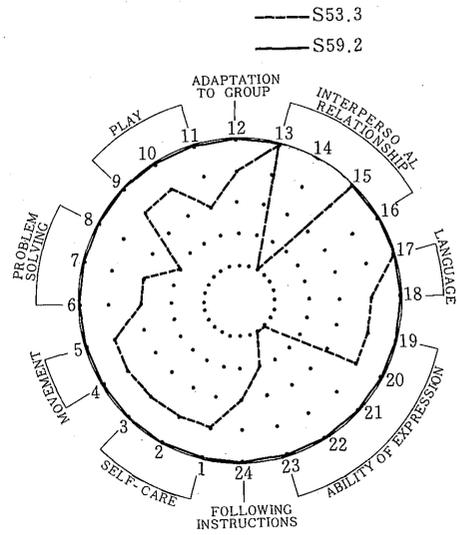


Fig. 1— 2. 症例 2 (K. Y.) T—CLAC

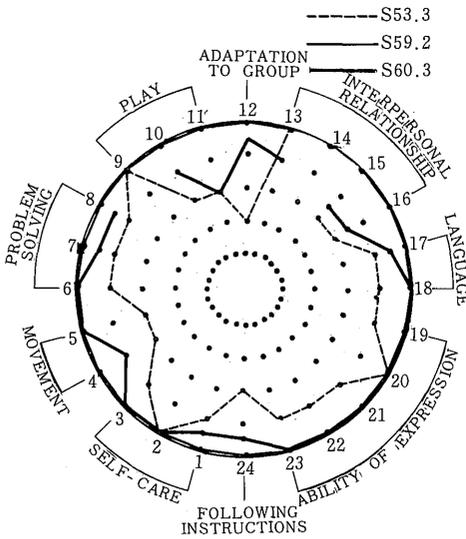


Fig. 1— 3. 症例 3 (M. S.) T—CLAC

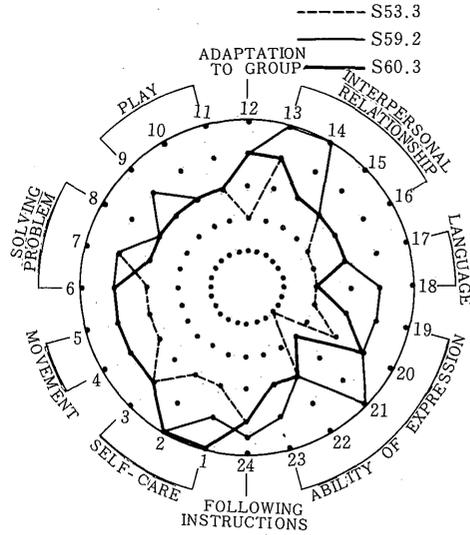


Fig. 1— 4. 症例 4 (M. N.) T—CLAC

Table 2. 対象児の田中・ビネー検査結果

	CA	MA	IQ
症例 1	13 : 00	6 : 06	50
(T. M.)	14 : 00	5 : 04	38
症例 2	12 : 05	10 : 00	80
(K. Y.)	13 : 06	9 : 01	67
症例 3	11 : 11	14 : 09	125*
(M. S.)	12 : 12	14 : 05	111
症例 4	12 : 06	2 : 01	17
(M. N.)	13 : 07	3 : 00	22
症例 5	12 : 06	3 : 03	26
(H. T.)	13 : 07	3 : 08	27

(上段：小学校 6 年時，下段：中学 1 年時)

\* 教研式集団知能検査による。

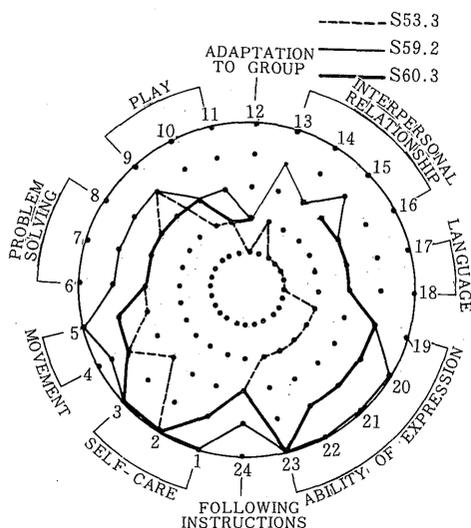


Fig. 1— 5. 症例 5 (H. T.) T—CLAC

画製作」，「指示に従う能力」の項目において伸びを示し，「食事習慣」，「運動能力」，「他人(同年輩者)との関係」で落ちこみを示している。

M. S. は前年度に上限に達していたにもかかわらず，今年度は「食事習慣」，「運動能力」，「課題解決意欲及び能力」，「大人との遊び方」，「子供との遊び方」，「集団適応能力」，「家族の大人との関係」，「他人(大人)との関係」，「他人(同年輩者)との関係」，「自発的言語」，「指示に従う能力」において落ちこみを示している。

M. N. は前年度よりも，「食事習慣」で伸びを示し，「課題解決意欲」，「テレビの見方」，「家族の大人との関係」，「兄弟姉妹との関係」，「言語」，「弁別能力」，「書く能力」，「絵画製作(態度)」，「指示に従う能力」で落ちこみを示している。

H. T. は前年度よりも，「食事習慣」，「運動能力」，「動作模倣」，「自発性」，「課題解決意欲及び能力」，「テレビの見方」，「子供との遊び方」，「他人(大人)との関係」，「読む能力」，「書く能力」，「絵画製作(作品内容)」，「指示に従う能力」で落ちこみを示している。

## (2) 知能検査

M. S. を除く 4 名に田中・ビネー知能検査を実施した。結果は Table 2. に示すとおりである。

M. S. は，諸事情により，個別検査を行わなかつ

たため，教研式集団知能検査の結果を示した。昨年度と比較すると，T. M.，K. Y.，M. S. が MA 及び IQ の低下を示しているが，M. S. は他の 2 名に比べて，落ちこみが少ない。M. N. は MA，IQ ともに上昇している。H. T. は MA がやや上昇しているが，IQ は昨年とほぼ同様である。

## (3) 適応行動尺度 (ABS)

M. S. を除く 4 名の，第 1 部及び第 2 部の領域標準点プロフィールを Fig. 2—1～2—4 に示した。K. Y. は MIL—II (IQ52—67)，T. M. は MIL—III (IQ36—51)，M. N. と H. T. は MIL—IV (IQ20—35) である。M. S. は MIL—0 であり，ABS では「普通」に位置づけられるため，標準点換算表に記載されていない。なお，本検査は昨年度実施されていないため，本年度の結果のみを示した。

T. M. は，知能水準から予想される行動レベルに達していない項目が「家事」であり，同レベル以上に達成されている項目は「身体的機能」，「経済的活動」，「数と時間」，「仕事」，「責任感」である。その他はすべて知能水準相当の行動レベルに達している。

K. Y. は，知能水準から予想される行動レベルに達していない項目は「家事」のみであり，同レベル以上に達成されている項目は「経済的活動」

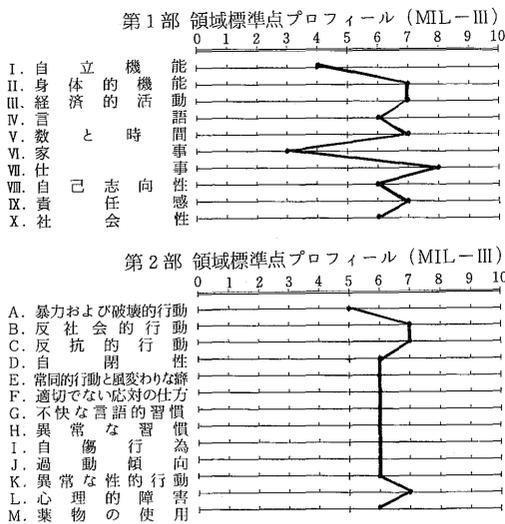


Fig. 2-1. 症例 1 (T. M.) 適応行動尺度

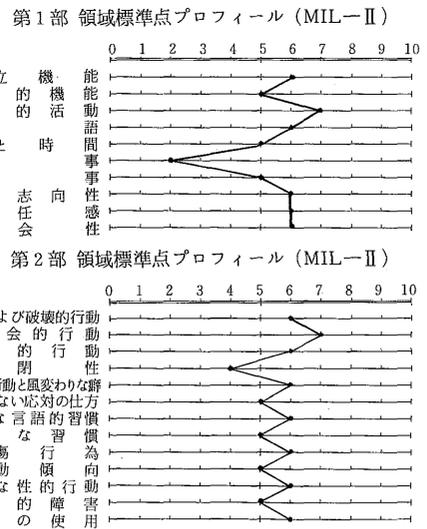


Fig. 2-2. 症例 2 (K. Y.) 適応行動尺度

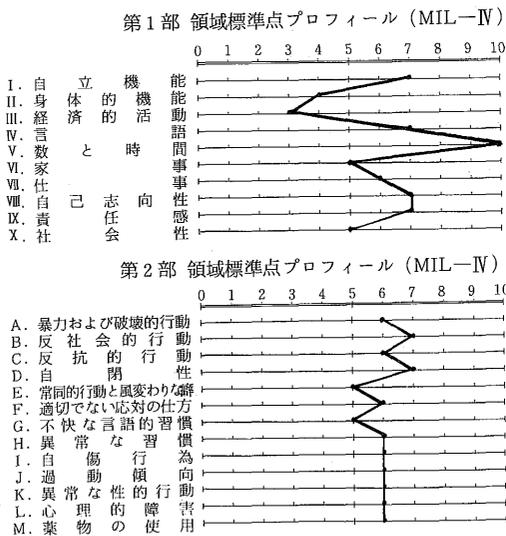


Fig. 2-3. 症例 4 (M. N.) 適応行動尺度

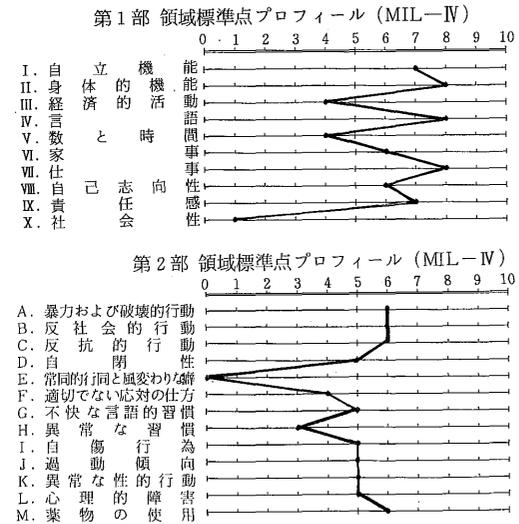


Fig. 2-4. 症例 5 (H. T.) 適応行動尺度

及び「反社会的行動」である。その他はすべて知能水準相当の行動レベルに達している。

M. N. は、知能水準から予想される行動レベルに達していない項目が「経済的機活」であり、同レベル以上に達成されている項目は「自立機能的機活」、「言語」、「数と時間」、「自己志向性」、「責任感」、「反社会的行動」及び「自閉性」である。その他はすべて知能水準相当の行動レベルに達している。

H. T. は、知能水準から予想される行動レベル

に達していない項目が「社会性」、「常同的行動と風変わりな癖」及び「異常な習慣」であり、同レベル以上に達成されている行動は「自立機能的機活」、「身体的機活」、「言語」、「仕事」及び「責任感」である。その他はすべて知能水準相当の行動レベルに達している。

#### (4) インタビューの結果

T. M., M. N. 及び H. T. のインタビュー内容は、学級担任と母親からのものであるが、K.

Y.は母親のみ、M. S.は学級担任のみの調査である。

#### T. M.

3学年あわせて9名の生徒で構成されている特殊学級に在籍しており、集会と行事に限り普通学級との交流がなされている。教科学習では国語と社会が特にすぐれている。なかでも、作文や地名の記憶力は高く評価されている。一方、評価が低い教科は美術である。学級では副委員長を務め、その他の分担された役割も適切に行える。他生徒との関わり方は受け身的である場合が多いが、友人と自宅で遊ぶこともある。

#### K. Y.

私立中学校の普通学級に在籍している。バスと電車を利用し1人で通学できる。教科学習では成績が学級最下位であり、特に英語、数学、歴史の遅れが著しい。国語は漢字の読み書きはできるが読解は困難である。図書部に所属している。特定の友人はおらず、本児の、場面に対応しない発語や同じ質問内容の繰り返しといった言語行動により、他生徒の嘲笑的になることが多い。しかし、休日に他生徒と遊ぶこともある。

#### M. S.

今年度より他県に転居し、公立中学校の普通学級に在籍している。周囲から注目されるような奇異な行動は少なく、授業場面でも教師の指名を待って発言できる。他生徒の反応を考慮しながらの発言もみられる。競争を伴う活動は不得意であり、負けるとパニックを起こすことがある。教科学習では主要5教科以外が遅れているという偏りがみられる。社会科は特にすぐれており、本人の関心も高い。国語は理解力が高く、書字もすぐれている。しかし、書字の速度は遅い。また創造性に欠ける部分がある。音楽では合唱が不得意で声の大きさのコントロールが困難である。そのため他の生徒から嘲笑されることがある。学級内では孤立する傾向にあるが、男女それぞれ2名の親しい友人がいる。特に女子の友人の指示にはよく従い、交流も頻繁に行われている。

#### M. N.

特殊学級に在籍し、体育、行事に限り、週2～3回普通学級と交流している。通学は1人で可能であり、通学途中の問題行動は消失している。個別指導による学習が行われており、学習態度は形成されている。学習内容は、平仮名、片仮名、簡単

な漢字の読みと書字であり、平仮名と片仮名の読みは可能である。読字可能な漢字数も増加している。書字は1人で可能であるが筆圧は弱い。給食時のストロー配り等の場面で数を操作できる。全体場面での教師や他生徒の指示に対しては大部分従うことができるが、会話は単語のみによるものが多い。活動がうまくいかなかった場面で、自傷行動がみられることがある。他生徒や教師に対しては頻繁に接近行動がみられる。

#### H. T.

3学年あわせて6名の生徒で構成されている特殊学級に在籍しており、2名の教師による集団指導が行われている。普通学級への参加は集会、行事に限られている。指導の重点は、対人交渉の拡大と集団参加に置かれている。教科学習では数学と職業家庭で特に遅れを示している。学級内での役割は指示がなくても行える。教師や他生徒の言語指示には従うことができるが、応答は単語で行う。集会での全体行動は適切に行える。他生徒とは、ボールの受け渡しなど簡単な遊びが可能であるが、持続せず一人遊びが多い。

## 4. 考 察

以上、対象児の現在の学校適応に関して、諸検査、チェックリスト及び親・担任教師へのインタビューによる情報収集の結果を述べた。これらの結果をもとに、方法の所で述べた三つの観点に基づき、各対象児の現在の学校適応状況についての検討を加える。

#### (1) T. M. (中学より特殊学級に在籍)

T. M.は、学習能力面では、知能的にみると中度精神遅滞であり、学業成績は中程度である。学校生活面では、諸検査及びインタビューの結果から適応状態は良好であるといえる。対人関係は受け身的である場合が多いが、友人と遊ぶこともあり、特に良好とも不良とも言えない。以上のことから、全体的に見て、T. M.は特殊学級という新しい環境へ適応していると考えられる。

#### (2) K. Y. (普通学級に在籍)

学習能力面では、知能程度は境界線であり、学業成績は下位である。学校生活の面では、ABSの結果から見ると、本児の知能水準としては十分な適応行動がとれているが、本児が普通学級に在籍しているために他児との差が大きく、このことが本児の不適応状態を引き起こしていると考えられ

る。対人関係では、インタビュー結果によると、特定の友人がいなかったことや不適切な発語のために他生徒の嘲笑の的になっていることから、良好であるとは言えない。以上のことから K. Y. は、全体的に見て、不適応状態にあると考えられる。

### (3) M. S. (普通学級在籍)

M. S. は学習能力の面では、知能は正常であるが、学業成績は主要 5 教科が上位、他の 4 教科が下位と大きな偏りを示している。学校生活面では、T-CLAC によると「集団適応」は 4.5 であるものの、インタビュー結果からは、行動面での不適応が示唆される。本児は IQ が高いため、ABS の標準点を算出することはできなかったが、実際には検査を実施しているので、ABS の下位領域得点を MIL-I (境界線児の知能水準) で標準得点化すると、第 1 部、一般的適応において、「家事」、「仕事」、「社会性」が 0、「責任感」が 2 と、知能水準相当レベル以下となる。また、平均も 3.2 である。従って本児は IQ スコアに対比して、行動レベルが著しく低い。さらに第 2 部においても、13 項目中 7 項目が標準点 0 と、不適切行動が顕著にみられる。従って本児は、普通学級において多くの不適切行動を示していることが予想される。対人関係の面では、T-CLAC の「対人関係」の項目では 3~4 段階を示しており、また、上述の方法で ABS の標準点を算出すると「社会性」が 0 である。インタビューでは、2 名の親しい友人がいるが、学級内では孤立していることが示されている。M. S. は今年度から他県に引越したため、そのことが対人関係に影響を与えていることも考えられる。以上のことから、M. S. は全体的に見て、不適応状態であると考えられる。

### (4) M. N. (特殊学級在籍)

学習能力面では、知能的にみると重度精神遅滞であり、学業成績についてはデータが欠落しているため不明である。学校生活面では、諸検査及びインタビューの結果から、適応状態は良好であると考えられる。対人関係では、T-CLAC の「対人関係」の項目は 3~4 の段階であり、ABS の「社会性」の項目では標準点が 5 で、これは知能水準相当である。以上のことから、M. N. は全体的に見て、学校に適応しているといえる。

### (5) H. T. (特殊学級在籍)

学習能力面では、知能的にみると中度精神遅滞であり、学業成績は中程度である。学校生活面では、

T-CLAC の「集団適応」においては 2 段階を示している。ABS では「社会性」以外の領域では知能水準相当かそれ以上の行動レベルを示している。また、インタビューからは、学校生活によく適応していることが示唆される。対人関係では、T-CLAC の「対人関係」の項目は 3~4 段階であるが、ABS の「社会性」の領域では標準点が 1 と、非常に低くなっている。インタビューの結果からも対人関係はあまり良好であるとは言えない。以上をまとめると、H. T. は対人関係に問題を残しながらも学校生活の面においては適応していると言える。

### (6) 総合考察

以上の考察をまとめると、部分的に問題を残しながらも学校生活に適応していると言えるのが T. M., M. N. 及び H. T. の 3 名、不適応が想定されるのが K. Y. 及び M. S. の 2 名である。適応していると考えられる 3 名は、いずれも特殊学級に在籍しており、適応している要因として、学級の人数が少ないこと、従って担任教師の目がこまめに行き届くこと、及び、インタビュー結果からもわかる通り、教師が生徒の行動に合わせた行動をとっていることなどがあげられる。一方、不適応と考えられる 2 名は、いずれも普通学級に在籍しており、その要因について考察すると、K. Y. は知能水準相当の行動を示しているが、他生徒との開きがあるために不適応を起しており、M. S. は能力的なアンバランスと、知能水準に対する行動レベルの低さが不適応の原因になっていると考えられる。

以上のことと、前年度(対象児はいずれも小学校 6 年時)の報告(加藤他, 1985)を比較すると、中学校への進学時に学級形態が変わった T. M. (普通学級とことばの教室から特殊学級へ)及び M. S. (普通学級と情緒障害児学級から普通学級のみへ)は、いずれも学校適応状態に変化がみられたと言えよう。しかし、本研究では各対象児の所属する学級の機能・形態について詳細に検討できなかったため、適応状態に関与すると思われる要因を明確に抽出できなかった。これらについては、今後の追跡調査の課題としたい。

### 文 献

- 1) 伊藤健次・近藤明子・雨宮政・竹花正剛・加藤哲文・久保田米蔵・松田玲子・池弘子・小

- 林重雄(1981)：自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究III(3)——自閉症状の消失した障害児について——，心身障害学研究，5(2)，29—42.
- 2) 伊藤健次・竹花正剛・加藤哲文・打越実・竹花裕子・高杉紀久子・近藤明子・池弘子・小林重雄(1983)：自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究IV(3)——自閉症状の消失した障害児について——，心身障害学研究，7(1)，49—58.
- 3) 加藤哲文・竹花正剛・伊藤健次・打越実・竹花裕子・高杉紀久子・平田菜穂美・近藤明子・池弘子・小林重雄(1984)：自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究V(3)——自閉症状の消失した障害児について——，心身障害学研究，8(2)，49—56.
- 4) 加藤哲文・高杉紀久子・打越実・小林万利子・浜田房子・前川久男・小林重雄(1985)：自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究VI(3)——自閉症状の消失した障害児について——，心身障害学研究，9(2)，123—132.
- 5) 小林重雄・杉山雅彦・山根律子(1978)：自閉症児の指導過程に関する研究(1)——T—CLACの標準化——，心身障害学研究，2，99—107.
- 6) 小林重雄編著(1980a) 自閉症児，川島書店.
- 7) 小林重雄(1980b) 自閉症，岩崎学術出版.
- 8) 小林重雄・前川久男・大野裕史・加藤哲文・園山繁樹・武蔵博文・平田幸宏・藤原義博(1983)：自閉性障害児の学校適応に関する追跡研究，安田生命社会事業団年報，14，69—86.
- 9) 近藤明子・高杉紀久子・伊藤健次・竹花正剛・井口裕子・小林明・池弘子・小林重雄・長畑正道・齊藤義夫(1979)：自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究I(4)——自閉症状の消失した障害児について——，心身障害学研究，3，121—134.
- 10) 太田千鶴子・山根律子・反保真弓・金原たか子・藤原義博・池弘子・小林重雄・長畑正道・齊藤義夫(1979)：自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究I(1)——目的と評価法について——，心身障害学研究，3，89—100.
- 11) 竹花正剛・近藤明子・井口裕子・長藤刺・古賀靖之・柴勝代・高杉紀久子・池弘子・小林重雄(1980)：自閉症状を示した障害児の学校適応に関する追跡研究II(3)——自閉症状の消失した障害児について——，心身障害学研究，4(2)，63—81.
- 12) 富安芳和・村上英治・松田惺・江見佳俊(1973)：適応行動尺度手引，日本文化科学社.

## Summary

### The Follow-up Studies on School Adjustment of Handicapped Children with Autistic Symptoms VII (3)

——On Whose Diagnostic Label Corrected——

Fumiko Fukui    Tetsubumi Katoh    Akiko Nishio

Kenji Itoh    Mariko Kobayashi    Fusako Hamada

Shouji Higo    Hisao Maekawa    Shigeo Kobayashi

Five handicapped children whose autistic symptoms had been improved on the process of therapeutic approach during infancy, were selected as subjects in the 7th-year follow-up study.

Two of subjects (case K. Y. and M. S.) had been attending at the regular class but none of them were well adjusted. The others (case T. M., M. N. and H. T.) were well adjusted to the special class. All subjects attended at the first grade of junior high school.

The current situation of their school adjustment was evaluated by several tests.

The tests administered were the check list (T-CLAC), the Tanaka-Binet Intelligence Test, the Kyouken Group Intelligence Test and the Adaptive Behavior Scale. Interviewing records with their classroom teachers and mothers were added in elaborating with the test results.

The results were summarized as follows;

(1) Check list:T-CLAC (T Check List for Autistic Childern) was used to check the behavior characteristics of 5 children. One (case K. Y.) had already reached to the ceiling, the result of one subject (case T. M.) was as same as before and the other three had the lower results than one year before.

(2) Intelligence:The IQ scores of 3 subjects (case T. M., K. Y. and M. S.) were lower than that of last year. The score of one subject (case M. N.) was higher than that of last year. THE score of the other one (case H. T.) had no change.

(3) ABS (the Adaptive Behavior Scale): All subjects but M. S. were tested by this scale. The results showed that all four revealed equivalent or higher adaptive behavior level as compared with their intelligence level.

(4) Interviews: All children have been improved fairly well in their schools.

**Key word:** autistic children, follow-up study, school adjustment, behavior therapy